

致知

特集

天地を開く



中井政嗣 & 木村皓一

インタビュー／梅若玄祥氏に聞く
刀根健一 & デービッド・アトキンソン

致知六月号

六月号(通巻四百七十九号)
昭和五十二年八月十六日第三種郵便物認可
平成二十七年五月一日発行(毎月一回日発行)

編集人 藤尾秀昭
発行人

発行所 致知出版社

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前4-2-4-9
TEL(03)3796-2111

定価一〇五〇円(本体九七二円)

自分らしく人生を締めくくるために
今できる「備え」があります。

死亡保険「あんしん世代」を知ったとき、
ピン!ときました。

孫たちへの贈りものにしようと思ったのです。
受け取る保険金額が手ごろで

祖母としての

ささやかな気持ちを伝えるのにぴったりです。

いまはまだ幼い孫たちの代わりに、

夫に受取人をお願いしていますが、

私のお葬式や法事の席で、成長した彼らへの

「びつくりプレゼント」になるかしら?

と、ちよつと嬉しくなりました。

加入者 H・Kさん(62歳・女性)



死亡保険 あんしん◆世代

手ごろな保険料で、万が一のお葬式代などに
備えられる、少額の死亡保険です。

死亡保険金は
100万円~900万円の
9コースから選べます。

たとえば、保険料は...
54歳 なら月払490円※1
女性
(死亡保険金100万円コースの場合)

新規ご契約
キャンペーン中!

2015年6月30日まで

※詳しくは資料請求時
にお送りするチラシを
ご覧ください。

保障は
90歳まで
継続できます
※2

79歳

までお申し込み
可能

SBI いきいき少短 関東財務局長
(少額短期保険)第8号

SBIいきいき少額短期保険株式会社
〒102-0073 東京都千代田区九段北1-8-10 住友不動産九段ビル

通話無料 0120-47-1234 午前9時~午後7時
(日・祝・休業日を除く)

http://www.i-sedai.com SBIいきいき 検索

※1.保険料は年齢・性別・加入コースによって異なります。※2.被保険者の誕生日と責任開始日が同一の場合は、90歳の誕生日の前日までが保障期間となります。◆死亡保険「あんしん世代」は、少額短期保険業者「SBIいきいき少額短期保険株式会社」の保険で、保障期間が1年間の掛け捨て型保険です。ご契約更新時の満年齢に応じ、保険料は5歳刻みで変更になります。詳しくは、資料請求時にお送りする「ご契約に際しての大切な事柄(契約概要、注意喚起情報、ご契約のしおり(抜粋)、個人情報保護方針)」等の資料を必ずご覧ください。◆健康状態によってはご加入いただけない場合もございます。◆お客様の個人情報については、当社利用目的以外には使用しません。詳しくは当社ホームページをご覧ください。
SBIいきいき少額短期保険株式会社 <B2-15-C-021(15.05.01)>



国際コミュニケーション学会
名誉会長
鈴木秀子

すずき・ひでこ——東京大学大学院人文科学研究科博士課程修了。聖心女子大学教授を経て、現在国際文学療法学会会長、聖心会会員。日本で初めてエニアグラムを紹介し、各地でワークショップなどを行う。著書に『幸せになるキーワード』（致知出版社）『9つの性格』（PHP研究所）『あなたは生まれたときから完璧な存在なのです。』（文春新書）などがある。

「傑作です。」 私は記者の顔を まともに見つめながら、 昂然としてかう 繰返した

芥川龍之介『沼地』

私たちが明るくいそいそとした人生を送ろうと思ったら、先入観なしに相手を受け入れ、自分が正しいと思ったことはつきり伝える勇気と寛容が必要で。芥川龍之介の短編小説『沼地』は、そのことを教えてくれています。



展覧会の片隅に掛けられた一枚の画

芥川龍之介に、本にして二頁という『沼地』という短編があります。雨の午後の絵画展覧会場の一場面の描写です。「私」という主人公は、採光の悪い片隅に貧弱な額に入れて、観衆から一顧さへも受けぬ小さな油絵を発見しました。無名の人の作品であり、濁水と湿った土と草木を描いた「沼地」と題する絵でした。

ことに、この画家は繁茂する草木を描きながら一刷毛の緑色も使っていない。絵一面、濁った黄色で塗り潰されているのです。なぜ、この画家はこんな色しか使わなかったのだろうかと思いつつ見ると、次第に、画から恐ろしい力が伝わってくるのです。画の描写は次のようです。

私はこの小さな油絵の中に、鋭く自然を掴もうとしてゐる、傷ましい芸術家の姿を見出した。さうしてあらゆる優れた芸術品から受ける様に、この黄いろい沼地の草木からも恍惚たる悲壯の感激を受けた。実際同じ会場に懸かっている大小さまざまな画の中で、この一枚に拮抗し得る程力強い画は、どこにも見出す事が出来なかつたのである。

ざけるように大声で笑います。そして、この画は、既に死亡している狂人の描いたもので、生前、この展覧会に出したがっていたので、遺族の強いての願いでこの片隅に掛けることになったのだと説明するのです。

得意そうに、声をあげて笑う記者の態度には、「私」の鑑賞眼のなさと、彼の優越感を裏づけようとするものがありました。しかし、記者の思惑ははずれました。

彼の話を聞くと共に、殆ど厳粛にも近い感情が私の全精神に云ひやうのない波動を与へたからである。私は悚然として再びこの沼地の画を凝視した。さうして再びこの小さなカンヴァスの中に、恐ろしい焦燥と不安とに虐まれてゐる傷ましい芸術家の姿を見出した。

記者は、画家が思うとおりに画が描けないために気が狂ったという点に同情していました。今回の出品を「その生命を犠牲にして僅に世間から購ひ得た唯一の報酬だった」と考えたのです。

私は全身に異様な戦慄を感じて、

三度この憂鬱な油絵を覗いて見た。そこにはうす暗い空と水との間に、濡れた黄土の色をした蘆が、白楊が、無花果が、自然それ自身を見るやうな凄じい勢いで生きてゐる。……

「傑作です。」

私は記者の顔をまともに見つめながら、昂然としてかう繰返した。

この短編は、文壇の中で、立場を異にするゆえに、理解しようとなし人々に対しての、芥川龍之介の「我が道を行く」という宣言とも読むことができます。しかし、そうした背景を抜きにして、この作品にじかにぶつかる時、この『沼地』の中に象徴されていることが、私たちの毎日の生活とも密に繋がっているのを感じるのです。

そのものが語り掛ける 無言の言葉に耳を傾ける

私たちは、画や本や風景や人や、その他あらゆる芸術作品に、毎日対面しています。例えば、一冊の本を取り上げる時も、多くの場面、人から題名とか内容について聞き、先に、ある程度の興味を持って

ます。よいとか悪いとかの判断を、往々にして、他の人の権威ある意見に頼りがちです。自分が感じ取るものだけを頼りにすることは、不安なものです。

ましてや情報の溢れている現在では、いろいろなことにまず予備知識を持ち、それに照応しながら価値の判断を下そうとします。社会生活をしていく上で、これももちろん必要なことです。

しかし、何か物事にぶつかった時、私たちは頭や心を空っぽにして、そのもののこらへ語り掛けてくる無言の言葉に耳を傾けることが大切ではないでしょうか。そして、相手のものから受ける感じを心で味わってみる必要がないでしょうか。

他人や、偉い人が何といつてもいいでしょう。私に、相手の人なり物は、こう語り掛けている。そして私はそれをこう理解するのだという自信が尊いのではないかと思います。

「心の瑞々しさ」は、そうした無心の状態からものごとの中へ飛び込んでみることによって、保ち育てられるのではないのでしょうか。もう随分前になりますが、お年

を召された有名な美術評論家に、陶芸の展覧会へ連れて行っていただいたことがありますが。会場の前の庭で足を止めて、この先生は私にこう言われました。

「さあ、これから中を自由に歩き回りなさい。自分の目で見てご覧なさい。好きなだけ見るがいい。そして一つだけ心引かれる作品が見つかったら、その前にじっと立っていなさい。その一つの作品のために後ろ髪を引かれる思いで会場から出てくるようだったら、人生の中の幸せな一日と言えるでしょう」

私はこの言葉を聞いて以来、どんな展覧会へでも出掛けて行くのが楽しみになりました。それは、思いがけない芸術品との出会いへの期待に根ざしています。また、自分の感受性が、どのような作品に対して、どんな反応を示すかという興味も手伝っています。そして、この忠告は私の毎日の生活の中でも生きています。私は時々、きょうの一日の中で、一つの作品として心魅せられる出会いや会話や出来事や時間はどれに当たるだろうかと思いを巡らしたりするからです。

日本が世界地図から消滅しないための戦略

用意周到な大国 用意周到でない日本

歴史が教える 国家存亡の法則

過去70年で、180以上の国が消滅している。国家存亡の鍵は「用意周到」にあり。

- 歴史は国家興亡の記録
- カルタゴの歴史の教訓
- 日本が直面している危機
- 成功の頂点で出現した逆転潮流
- 転換できない日本
- 大国の条件は用意周到
- 北極航路を目指す中国の用意周到
- 人口減少へ対応する
- 魅力を国力とする時代
- 世界に発信すべき日本の縮小文化

気鋭の論客

月尾嘉男氏

全頁書き下ろし

全国民必読の救国論

5月下旬
発売

Amazonで先行
予約受付中!

日本が世界地図から消滅しないための戦略

月尾嘉男=著 予価=1,600円+税/四六判上製

6月20日(土)

本書の出版記念講演会を
新宿で開催します。

詳細はP94をご覧ください。



月尾嘉男氏

Amazonで先行予約受付中!

[連載③]人生を照らす言葉

相手を受け入れる 勇気と寛大な心

次に、芥川の『沼地』の中で考えさせられる点は、私たちの心の中に、執拗に、この作中の新聞記者が任んでいるという事実です。「私」に比較して新聞記者は先入観や既成概念で凝り固まってしまっています。「沼地」という画自体を見ようともせず、狂人の描いた画が見るに堪えないようなものと定めてかかっているのです。

私たちも自分自身をしつくり観察してみると、いかに多くのことを先入観や既成の価値観で決めつけてしまっているかに驚かされるのです。一つのものを見方しかできず、全く一方的な判断を急速に下してしまっています。

私の親しい友人に、ある大学教授夫人がいました。夫の父も学者でした。彼女は結婚するに当たって、夫となるべき人からこう言われました。

「母が、烏が白いと言ったら、烏は黒色ではなく、白い色に見えるような目を持つように」
彼女は、この夫の言葉が何を意

味したかが、結婚したその日から嫌でも身にしみて分かりました。老夫婦、若夫婦一緒に住む家庭で、姑の言葉は絶対の力があつたのです。嫁は、姑が白と言えば黒いものでも白く見えるように、自分に言い聞かせました。彼女の結婚は想像以上に惨めなものであり、忍耐と自分の闘いと連続でした。

それが、ある時、久しぶりに彼女と会うと、明るく潑刺として、自信に溢れ、若々しくなっているのです。私は驚いて、どんな変化が彼女の境遇にあつたかを聞くと、周りは何一つ変わっていないといえます。そして彼女は次のような意味の説明をしてくれました。

「私は自分の考えや思っていることを、はっきり表明する決心をしたのです。辛い体験をおして私が結婚生活から学んだことは、他の人が、物事を必ずしも私の目に映るとおりには見えないということ。私の目に黒と見えることでも、白に見える場合があると分かったのです。十人いれば文字どおり十色の物の見方があることをまず許し、それを理解し、その上で私も自分の考えや意見を述べようと決心したのです」

彼女の話を聞きながら、心の持ち方次第で人がこのようにも変わるものかと、私は、ただ驚いていました。そして、性急に物事を既成概念や先入観で決めつける習慣が私の中にいかに根深いかを反省し、彼女の辛い体験の裏から私も学ばせてもらいたいとつくづく考えたことでした。

『沼地』の中で「私」が、あくまで自分が感じ取ったことに忠実であり、世評がどうあれ、自分の確信をはっきり言い切っている態度には見事なものがあつます。「私」は世評を代表する美術記者の自信溢れる意見に少しも動かされてはいません。「私」は狂人の描いた画を深く理解し、無名の芸術家の苦悩と、人間としての叫びを感じ取っているからです。一人の人間を許容し、大きな言葉で言えば、運命の共存を感じ取っている時、人は人間の評価には屈しません。一人の人間の尊さが身にしみているからです。

「私」はこの世で報われることのない画家をありありと感じているのです。そして、生命まで犠牲にして描いた一枚の小さな画から、彼の魂に触れているのです。

だからこそ、世間そのものである新聞記者のこの画を無視した不遜な態度に、正面から「傑作です」と記者の顔をまともに見つめて、昂然と繰り返すのです。

『沼地』を読むと、生きてゆくこととは、何と勇気のいることかと考えさせられます。他の人の立場があるがままに受け入れることに、まず大きな勇気と寛い心が必要で、そして多くの人のそれぞれの立場に理解を持ち、先入観なしにその立場を認めることも決して狭小の心ではできません。ましてや世間の風当たりを逆らって自分が正しいと思うことを、独善的でなく、穏やかに述べるのは、平穏な心と強い勇気が要求されます。

苦しい一生を送りながら、聖者と讃えられる人々の記録を見ると、何と多くの祈りが「勇気と寛大な心を与えてください」という叫びに満ちていることでしょうか。世界中のどの人にとっても、いきいきと生き抜くには、真の勇気と寛い心が土台として必要なのです。『沼地』を書いた芥川龍之介もまた、この事実を熟知し、勇気と寛大な心を求める祈りを知る一人だったのです。